

「彼らが都に入ると、泊まっていた家の上の部屋にあがった(使徒 1:13)」。彼らとは十一使徒(1:13)。その他「上の部屋」には多くの人があった。「彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、イエスの兄弟たちと心を合せて熱心に祈っていた(1:14)」。

あれっ、使徒とイエスの家族が共に祈るとは奇妙だ。イエスの生前、身内(マルコ 3:21)や家族(3:31)は、信仰の兄妹ではなかった(3:33～35)。しかし、イエスの教えやふるまいは不可解だったとしても、十字架と復活が、家族という「高い障壁」を取り去ったのか。

それでは、部屋にいる者をじっくり見極めてみよう。名が分かるのは使徒 11 人と母マリア。イエスの兄弟の名は「ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン(6:3)」。「婦人たち」とは、ガリラヤから従って来た女たちで幾人かは名も分かる(15:40～41)。加えて使徒やイエスの弟の妻たちもいただろう(1コリント 9:5)。目を凝らして見てみると、「上の部屋」で祈っている彼らは、なんと雑多な者たちであろうか。

この「上の部屋」、見覚えがあるぞ。イエスが使徒とだけ最後の晩餐をした(ルカ 22:14～16)定宿である二階の広間じゃないのか(22:12)。

限られた者だけの閉じられた晩餐と違い、今やまったく区分されない集団が「上の部屋」で祈っている。しばらくすると、聖霊降臨もこの部屋で起こる(使徒 2:1～2)。

「祈りを聞いてくださる神よ、すべて肉なるものはあなたのもとに来ます(詩編 65:3)」。祈りは聞き届けられ、やがてすべての肉が祈りを共にするだろう。その日を待ち望みながら今、私たちにとっての「上の部屋」で心を合せて祈る。

どんな祈りで心を合せるのか。「罪の数々がわたしを圧倒します。背いたわたしたちを、あなたは贖ってください(65:4)」。人間の自力では、己が罪と死の拘束から逃れられない。だが十字架が私を贖い、そこから解き放たれる。祈りは自由なる真実への応答なのだ。

「上の部屋」に生ずる真実の祈りは、多様な世間や社会層を乗り越え、キリスト者の心を一つにする(使徒 2:46,4:24,5:12)。私は、祈る者を信頼する。私自身の狭い判断や好みに優先して、祈る者を、それも「悔い改めた罪人」こそを信頼する。

「上の部屋」では、世の地位や名誉などまるで関係なく、キリストの兄弟姉妹が心を合せて共に祈る(1:14)。あたかも茶室のようではないか。にじり口で「袴」や「刀」を手放し、一つ碗で濃茶を回し飲みし、ここに存在し出合っている奇跡を尊び合うところが。

個々人の事としても、公の事としても、キリスト共同体には様々な問題や危機が起こる。だが私たちの「上の部屋」での一つなる祈りが、いかなる危機からも私たちを守る(12:5,12)。そればかりか、祈りは新たな試みをも起こさせる(13:3,14:23)。

どうして「心で祈る」ことが現実に力を持ち得るのか。神が祈りを「聞いてくださる(詩編 65:3)」から。まさか、神が情にほだされて「少しは動いてやるか」と腰をあげるなんてことはない。

「罪に圧倒されて背くわたし(65:4)」への赦しと愛が、イエスを十字架へ赴かせ、その「身代わり死」によって私たちが贖われるゆえに(65:4)、祈りは聞かれうる(65:3)。

「上の部屋」で心を合せて祈るとは「いかに幸いなことか(65:5)」。今、私たちが祈りを一つにしているこの場こそ「恵みのあふれるあなた(神)の家、聖なる神殿(65:5)」。

ここにこそ真の充足がある(65:5)。



《おまけのひとつ》

祈りは心の底にひそみ隠るる焔の燃え立つなり 祈りはきよけき御霊の風にぞある(讚美歌 308)
炎と風の讚美 人としての土(アダマ) 洗礼としての水も並べて 世の隅々に遍くキリストを祈る